

ハイデルベルク信仰問答より

問 52 「生ける者と死ねる者とを裁くために」というキリストの再臨は、あなたにどのような慰めを与えるのですか。

答え それは、あらゆる災や迫害の中にあっても、私たちのために神の裁きに対して、すでにご自身を捧げ、あらゆる呪いを私から取り除いてくださった天からの裁き主を、高く頭を上げて待ち望むためであります(ルカ 21:28、ピリピ 3:20)。それは主が、ご自分と私の敵を永遠の刑罰に投げ入れ(マタイ 25:41-43)、しかも、主は私をすべての選ばれた者たちとともに、みもとに召し、天なる喜びと栄光のうちに入れてくださるためであります(マタイ 25:34)。

今日扱う問 52 では、使徒信条の「かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを裁きたまわん」の部分を取り上げられています。ここでは、「キリストの再臨」に関する内容が扱われています。興味深いのは、主の再臨が信者にとっての「慰め」になると言われている点でしょう。これまで本問答書では繰り返し「益」という言葉が使用されてきましたが、ここに来て問 1 と同様の「慰め」に戻っていくのです¹。

「慰め」ということばは原語で「Trost」ですが、「励ます」「大胆にする」という意味もあります。主イエスの再臨を思うとき、信者は励まされ、大胆になれるというのです。再臨に対するイメージはそれぞれある程度異なるかもしれませんが、筆者自身のことを振り返りますと、その日に実施される「最後の審判」の恐ろしさを幼少の頃から感じていたことを思い出します。自分が罪深い存在であることを知った日から、死と審きがリアルに迫ってくるようになったのです。そのような経験を経てきた者として、再臨が「慰め」になると呈示されたことは、長年染み付いてきた思考を転換させるものとなりました。



「答え」の部分は以下のようにまとめることができるでしょう。

- ①呪いが取り除かれた慰め
- ②裁きが完了した慰め
- ③永遠の御国に入る慰め

¹ 問 1 生きている時も、死ぬ時も、あなたの唯一の慰めは何ですか。

答え 生きている時も、死ぬ時も、身も魂も、私自身のもではなく、私の信頼する救い主イエス・キリストのものであるということでありませぬ。

①呪いが取り除かれた慰め

まず、主イエスがどのような「再臨の主」であるかについて「**私たちのために神の裁きに対して、すでにご自身を捧げ、あらゆる呪いを私から取り除いてくださった**」と説明されています。

「**ご自身を捧げ**」という部分では、主イエスが「大祭司」兼「犠牲の小羊」の二役を担われたことが表現されています。そして、そのような苦しみを敢えて通られた目的は、「**あらゆる呪いを私から取り除いてくださった**」であると説明されています。罪の支配下に置かれていた者への呪いが解かれたというのです。

犯したくない罪があるのにそれをやめられず、自分を責め、人の目を避け、神に対する恐怖心を抱いて生きているとするならば、これを「呪い」と言わずに何と呼ぶことができるでしょうか。人間を苦しめる悪循環パターンから解放することができるのは、救い主イエスただお一人です。この方は私たちを罪の縄目から解放し、神の裁きをその身に引き受けてくださいました。

②裁きが完了した慰め

「慰め」の第二のポイントは「**ご自分と私の敵を永遠の刑罰に投げ入れ**」という部分にあります。ここでは、聖なる神の国には罪の入り込む余地なきことが言い表されています。主イエスは審判者として地上の物事のすべてを正しく裁き、神の基準で善悪を判断されます。システィーナ礼拝堂の壁画、ミケランジェロの「最後の審判」では、キリストが右手を上げてすべての審判を下しておられる様子が描かれています。そこでは、喜び、怒り、絶望といった様々な感情が人々の間で行き交い、混沌と秩序が交錯しているようです。歴史の裏側、すべての物事の動機や真の目的が明らかにされるとき、「歴史では本来こんなことが起きていたのか」という衝撃が走ることでしょう。そして、誰もがキリストの裁きの正しさを認める状況になるのです。

ここで重要なことは、キリスト者も主イエスの御前に立たなければならないということです。そして、地上の生涯全体を問われることは免れ得ません。しかしその時、私たちは「裁きは完了済み」という証印を押された状態で主の御前に出るのである。なぜなら、私たちの審判は主イエスの十字架において完了しているからです。

「敵」とは、罪を処理することなくその人生を歩み抜いた人々を指すでしょう。「完了していない罪」は、その場で裁かれなくてはなりません。その時、右へ行くか左へ行くかは、主イエスの十字架という証印のあるなしにかかっています。私たちは、他のすべての人々と何ら変わりませんが、「信仰」という証明書を持っているのです。

③永遠の御国に入る慰め

「慰め」の第二のポイントは、以上のことを踏まえた上で「**主は私をすべての選ばれた者たちとともに、みもとに召し、天なる喜びと栄光のうちに入れてくださる**」ことです。審判者なる主イエスはどのようなことばを語られるのでしょうか。「無罪」「この人はわたしの弟／妹である」「わたしの衣を着ている者だ」「小羊の血が塗られた人」などと言ってくれるのか……。

重要なことは、私たちは本来そのように呼ばれる資格のない存在であったということです。
②に照らして言うなれば、私たちこそ主イエスに敵対する者だったのです。

もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。(ローマ5:10)

このようにして、私たちは永遠の祝福の世界へと入っていくことができます。「天なる喜び」「栄光」をこの目で見ることになるのです。

自分が罪人であることを知っている人は、誰一人として再臨の日を恐れずにはいられないでしょう。しかし、私たちは同時に自分をその罪から最終的に贖ってくださる方として主イエスを仰いでいるのです。ですから、畏れつつ喜びの日を待ち望むのがキリスト者の真の姿と言えるでしょう。へりくだりと感謝、悔い改めと喜び。これらは相矛盾するものなのではなく、深い相関性をもっているのです。